

道徳の基盤と自粛警察:コロナ禍で見えてくる私たちの価値観

(本学教職研究科教授 荒木 寿友)

私の専門は教育方法学です。中でも道徳教育を中心に研究活動をおこなっています。今回は人類史にも残るであろう新型コロナパンデミックにおいて見られた人間の行動について、考えてみましょう。

一時期、「自粛警察」という言葉が世間を賑わせました。自粛警察とは、国や自治体から外出や営業に対して自粛要請が出ている中で、外で遊んでいる子どもや、経済的な理由などから自粛せずに営業をしている店舗などに対して、私的に「自粛しなさい」という意図の「取り締まり」を行うことを指します。なぜそのような行動に駆られる人がいるのでしょうか。これについて考えていく前に、最近の道徳心理学などで明らかになってきていることを、まずは見てみましょう。

アメリカの社会心理学者であるハイトは、社会的直感モデル(social intuitionist model)に基づいて、道徳基盤理論(moral foundation theory)を提唱しています。ハイトが主張したのは、人間はまず直感的に物事に反応し、その直感に合致するような判断を後付けて行うというものでした。ハイトは「無害なタブー侵犯ストーリー」(たとえば飼っていたペットが車にひかれて死んだので料理して食べたという話など)という生理的嫌悪を覚えるけれど、それを合理的に説明できない事例を用いた調査によって、人間は直感的に抱いた感情に何とか合うように理由付けをする傾向があることを明らかにしました。そして、この直感的に抱く道徳の源泉(基盤)が6つ程度あることを示しました。これが道徳基盤理論です。

その6つは、「ケア/危害」「公正/欺瞞」「忠誠/裏切り」「権威/転覆」「神聖/墮落」「自由/抑圧」です。たとえば、自粛期間中に公園で遊んでいる子どもを見たとしましょう。ある人は「部屋にこもってストレスが溜まるから外で遊ぶことも大事だよ」と「ケア」から考える人もいます。ある人は「自粛がすべての人に対して言われているのにけしからん」と「忠誠」や「権威」の点から考える人もいます。「子どもが遊ぶから感染が広がるんだ」(むしろ大人の方が広めましたが…)と「神聖」の点から考える人もいます。要するに、直感的にどの源泉を選ぶかによって、その後の判断理由付けや行動が変わってくるのです。

自粛期間中に店舗が開いていることに対しても、集団

として結束を強めてコロナウイルスに立ち向かっていく時期であるにも関わらず、それを「裏切っている」と怒りを感じる人もいます。あるいは国や自治体が要請している中で、それに従わない人は気に入らないという主従関係の「権威」から考える人もいます。また、コロナウイルスに罹患した人を差別的に避けるのは、「神聖」というところから導かれた感情かもしれません。危機的な状況下で働く医療従事者などは、直感的に「ケア」の点から働いているのかもしれませんが(ありがとうございます!)。自粛を強制(要請ではなく)してくることに對して、私たちの「自由」を奪うものだという人もいます。かもしれませんね。

このような観点から自粛警察を改めて見てみると、おそらくは「忠誠/裏切り」「権威/転覆」「神聖/墮落」の源泉を中心に物事を捉えている傾向があるのではないかと思います(調査をしたわけではないので、あくまで仮説ですが)。

人類が誕生して以来、人間は直感によって生き長らえてきました。危険なものからはすぐに逃げ、怪しいものは食べず、といった具合に。人間は直感的な生き物であるからこそ、数万年経った今は、ちょっと立ち止まって考えること=熟慮がむしろ必要です。また、自分の直感をメタ的に捉えていくこと(いま自分はどの道徳の源泉に基づいて考えているのだろうかということを考えること)も必要でしょう。こういった作業をすることによって、自分が大切にしている価値観がわかってきます。それと同時に、他の人がどんな道徳の源泉を大切にしているかを理解することも必要になってきますね。

熟慮と自己理解、他者理解がこれからの道徳教育の鍵となってくるでしょう。

さて、あなたはどの道徳の源泉の影響を強く受けていますか?

何に対して自分が怒るのか(不快な感情になるのか)を見つめると、わかりやすいですよ。

おすすめ書籍

J.ハイト著、高橋洋訳(2014)『社会はなぜ左と右にわかれるのか:対立を超えるための道徳心理学』紀伊国屋書店。